

### Ⅲ 遺 物

遺物には土器・土製品、屋瓦、銭貨、金属製品、石製品がある。その大半は土器であり、屋瓦がそれに次ぐものの少量で、ほかはごくわずかである。以下、種類別に記述する。

#### 1. 土器・土製品 (PL. 7・8, fig.10~14)

土器は調査区全域から整理箱30箱分が出土したが、調査面積に比べて少なく、その約3割が東区の灰褐色土層出土で、西区からは少ない。遺構に伴う土器の大半は7世紀後半～8世紀初頭の土器で、東一坊大路の側溝SD5110・5111出土土器が量的にややまとまっているほかは、溝、井戸、土壇、建物の柱穴等ともに少量づつである。種類では、大部分を占める土師器、須恵器のほかに弥生土器、瓦器、施釉陶器がある。施釉陶器には灰釉、緑釉、青磁、白磁があるが、いずれも灰褐色土層出土の細片である。以下、土器を遺構別に説明し、陶硯、土馬、鞆羽口、埴輪などの土製品については一括して記述する。なお、土器の時期区分、器種名、調整手法名などは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、『平城宮発掘調査報告』Ⅶに準拠した。

**SD5110・5111出土土器** (fig.10, 1~14, 16~28) 東一坊大路SF5100の両側溝で、溝はともに上下2層に大別され、上層が埋立土で下層が堆積土にあたる。飛鳥Ⅲ期からⅤ期までに対比される土器が含まれ、下層に古い時期の土器が多いが、主体はⅣ～Ⅴ期(藤原宮期)の土器である。器種には土師器杯A、杯B、杯C、杯D、杯G、杯H、高杯A、鉢、壺、甕と須恵器杯A、杯B、蓋、皿A、平瓶、壺、播鉢、甕などがある。

**土師器** 杯AにはAⅠ(5)とAⅢ(1)とがある。5は底部をヘラ削り、口縁外面をヘラ磨きするb<sub>1</sub>手法、口径18.6cm、器高4.5cm。SD5110下層出土。1は底部ナデ調整のa<sub>1</sub>手法で、口径12.4cm、器高2.6cmと浅い。SD5110上層。杯CにはCⅠ、CⅡ(6)、CⅢ(2)がある。2は浅く底部ナデ調整で口縁外面のヘラ磨きを省略したa<sub>0</sub>手法で、口径12.2cm。SD5111上層。6はb<sub>1</sub>手法で口径15.2cm、器高4.0cm。飛鳥Ⅲ期に対比される。SD5110下層。杯HにはHⅡ(7)とHⅢ(3)とがある。SD5110下層出土の7は、口径15.6cm、器高5.1cmと深く、飛鳥Ⅲ期の可能性がある。杯G(4)は口縁部を横ナデするだけの小型の杯で、暗褐色で金雲母を含む。杯D(8)は内湾気味の口縁で端部が内側に肥厚する。外面にヘラ磨きを施すが、内面に暗文はない。口径14.6cm、器高3.9cm。淡褐色。SD5111下層。皿A(12・13)は口縁端部が内側に肥厚する。底部外面を軽く削り、内面にラセン暗文と一段放射暗文がある。12は口径21.5cm、器高2.6cm。SD5111上層。13は口径22.4cm、器高2.8cm。SD5110下層。鉢(9)は杯Dと同じ胎土で、体部外面を横方向に削る。SD5111下層。壺B(11)は杯Gと胎土や調整が共通する粗製品。口径6.0cm、器高4.8cm。SD5110下層。10は赤褐色で砂質の胎土の脚部であるが器種は不明。甕には外面がハケメで口縁端部外側に面をもつものが多い。ほかに、口径20cm程の中型の甕Cで、外面に粗い平行叩き目をもつものがある。14はSD5110下層出土の小型の甕Aで体部内面はナデ。口径12.8cmで、弧状溝SD5113出土の甕A(15)と同法量であるが、15の口縁端部は丸い。

1. 飛鳥Ⅳ期とⅤ期とは、個々の土器については区分することの困難な場合があり、その場合ここでは便宜的に藤原宮期の名で呼ぶことにする。

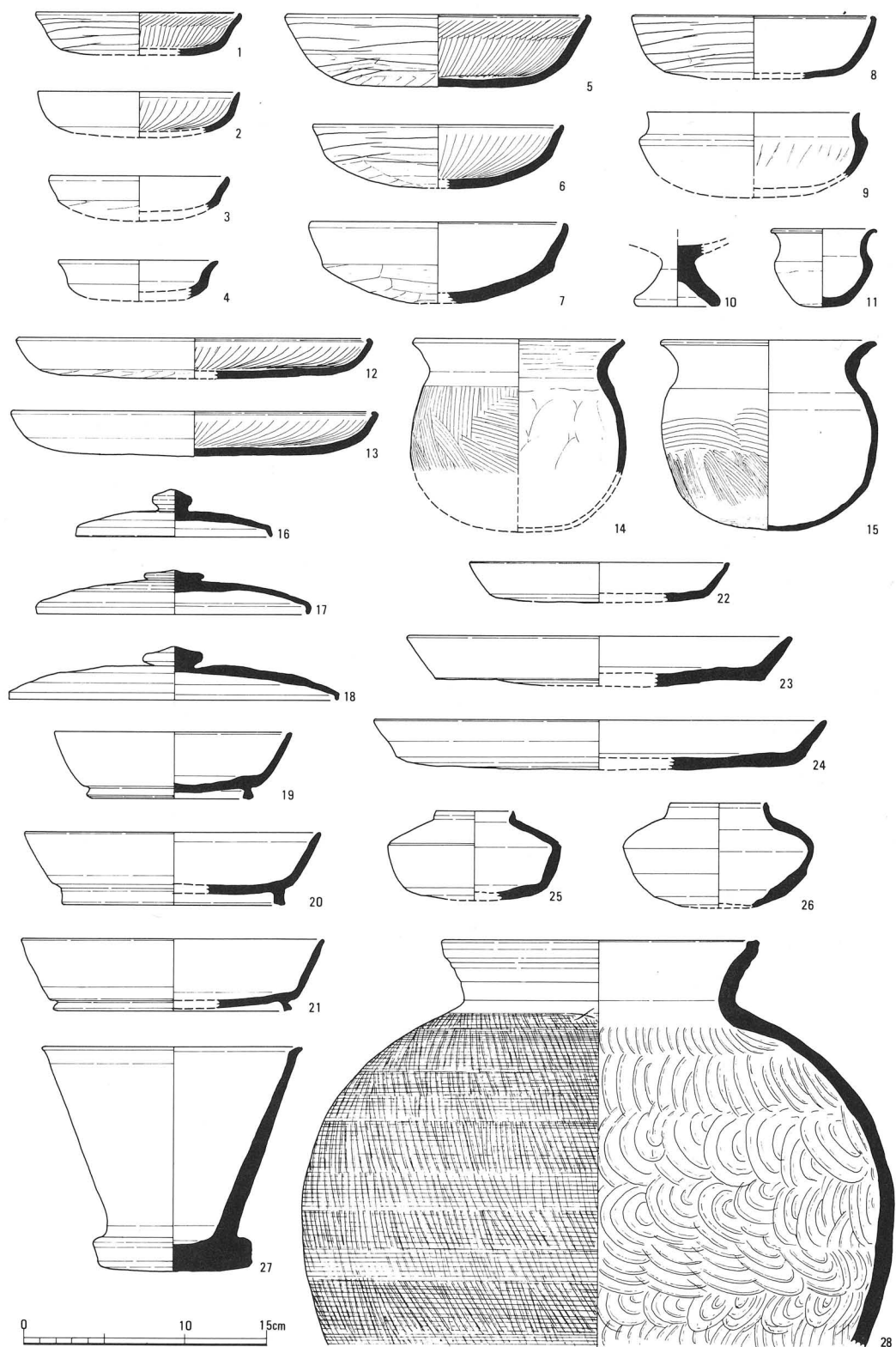


fig.10 出土土器実測図 I (SD5110・SD5111・SD5113 1/4)

須恵器 杯B (19~21)にはB IIとB IIIがある。杯B III (19)は底部ヘラ切りで、口径14.4cm、器高4.1cm。杯B II (20・21)の底部はロクロ削りで、20の高台はやや高く直立気味である。いずれもSD5110下層出土。杯B蓋にはB III蓋(17)とB II蓋(18)がある。頂部をロクロ削りし、口縁端部は丸みをもって小さく突出する。17は口径16.5cmで扁平なつまみ。18は口径20cmでつまみは大きい。蓋(16)は口径に比して大型の宝珠形つまみがつく。内外面に残る重ね焼の痕跡から、この蓋は口径11cm、底径8cmの大きさの椀Aの蓋と思われる。皿AにはA I、A II、A IIIがある。A I (24)は底部ロクロ削りで口径27.6cm、器高3.1cm。SD5111上層出土。A II (23)の底部はヘラ切りのちナデで口径23.4cm、器高3.1cm。SD5111下層出土。ともに白色で砂を多く含む。皿A III (22)は青灰色の精良土で、口縁がわずかに内湾する。口径11.4cm。SD5110上層出土。壺類には、小型の短頸壺(25・26)のほかに、長頸壺、大型短頸壺、平瓶などの小片がある。25は断面三角形の小さな口縁で、平らな底部を手持ち削りで仕上げる。口径4.6cm、器高5.6cm。丸底の26はロクロ削り。SD5111上層出土。播鉢(27)は頑丈な底部から大きく開く器形で、口径15.6cm、器高18.9cm。SD5110下層から出土した底部と西区の東西溝SD5175から出土した口縁部とが接合した。両溝の埋没時期が近いことを示す資料である。甕A (28)は口縁端部が直立し上面に面をつくる。頸部にヘラ記号がある。口径18.6cm。SD5110出土。

両側溝出土土器にはともにかかなりの型式差があり、そのうち最も古いと考えられる5・6などは飛鳥Ⅲ期に対比されるが、周辺からも同時期の遺物が出土しており、これが溝の開削時期

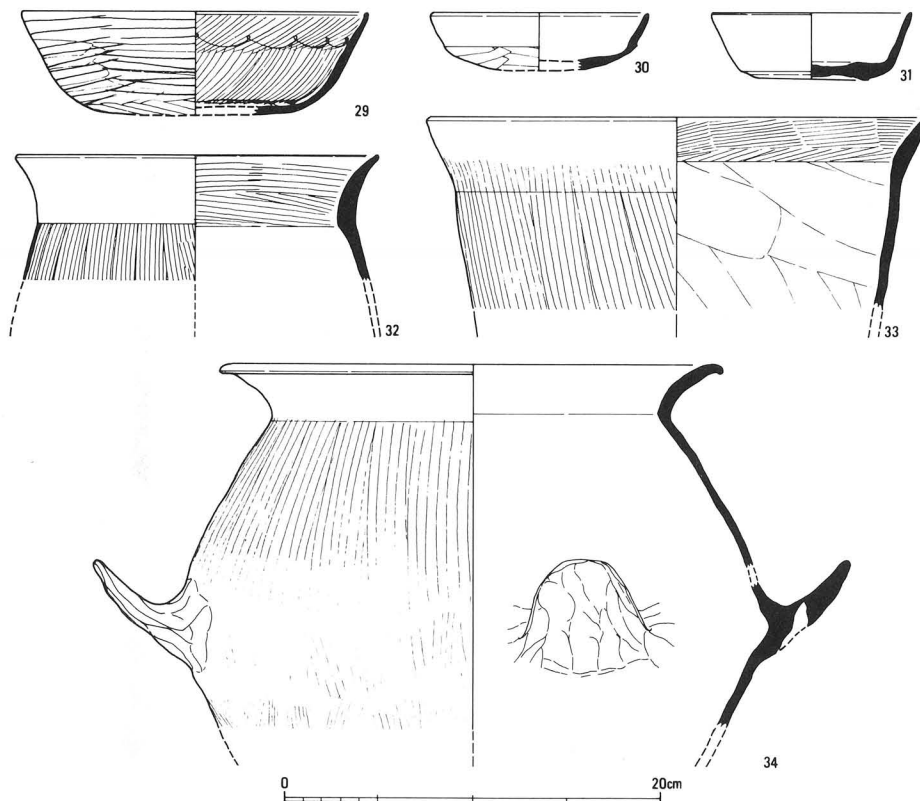


fig.11 出土土器実測図 II ( SE5120 1/4 )

を示すものとみることはできない。また、最も新しいと思われる1・2が飛鳥Ⅴ期に対比されることから、溝の廃絶は平城遷都後間もないころと推測されよう。

**SE5120出土土器** (fig.11, 29~34) 東区の横板組井戸で、枳板の内側から出土した。土師器杯A、杯C、杯H、甕A、甕B、甗、須恵器杯AⅣがあり、飛鳥Ⅳ期に対比される。土師器杯AⅠ(29)は $b_1$ 手法で口縁端部がわずかに内側に屈曲し、内面には二段の放射暗文に加えて、連弧状の暗文をつける。口径18.1cm、器高5.6cm。土師器甕A(32)は口径19cmで口縁端部は小さく丸い。甕B(34)はくの字に開く短い口縁で、丸い体部の中程に挿入式の把手がつく。甗(33)は、34と同じ茶褐色の胎土で、外面のハケメがかすかな点も類似する。口径26.3cm。須恵器杯AⅣ(31)は底部ヘラ切りのままで、口径10.3cm、器高3.6cm。

**SD5112出土土器** (fig.12, 46・47・50・51) 東側溝SD5110に流れ込む東西溝で、土師器杯A、杯C(46)、杯H、杯G、甕A(47)、甕B、須恵器杯A、杯B(50・51)、杯B蓋、皿、甕などがある。いずれも側溝出土土器に類似し、藤原宮期に属す。土師器甕A(47)は体部内面をハケメ調整し、砂を多く含む白っぽい胎土。口径12.2cm。

**SD5116出土土器** (fig.12, 52・53) 須恵器杯BⅢ(52・53)のほかは小片。ともに底部ヘラ切りで、52は口径15.3cm、器高3.7cm。口縁部との境がまるい。53は角ばって直線的に開く。

**SD5118出土土器** (fig.12, 56・57) 土師器杯C、杯H、須恵器杯G(56・57)があるが、器形の知れるものはいずれも飛鳥Ⅲ期に対比される。これらは溝の周辺に広がる浅い土壌状の窪みの土器(55・58~60)と同じ内容で、溝に伴う土器ではない。また周辺に散在する小穴からは、杯CⅠ(39)や杯HⅠ(40)など飛鳥Ⅱ期に属す土師器が少量出土しており、この時期の遺構の存在を窺わせる。なお、須恵器甕(60)の色調・胎土は土師器に似て淡褐色で軟質である。

**SB5101柱穴出土土器** (fig.12, 36) 土師器杯AⅠ(36)、杯CⅢがある。36は小片であるが、端部をわずかに屈曲させた口縁で、内面に細密な二段放射暗文がある。飛鳥Ⅳ期。

**SB5102柱穴出土土器** (fig.12, 37・38) 柱掘形から土師器杯CⅠ、高杯(38)が、柱採取穴から土師器杯AⅠ(37)が出土した。37はほぼ完形の個体で口径17.6cm、器高4.0cm。内面に二段放射暗文とラセン暗文があり外面を密に磨く。形態・手法から飛鳥Ⅳ期に対比される。

**SB5103柱穴出土土器** (fig.12, 49) 須恵器杯BⅢ(49)がある。底部はヘラ切りののちにナデ、口径13.9cm、器高4.0cm。藤原宮期。

**SB5105柱穴出土土器** (fig.12, 43) 土師器杯CⅡ(43)がある。 $a_0$ 手法で口径12.9cm、器高3.3cmとやや深い。暗文も細かく飛鳥Ⅳ期に対比されよう。

**SB5107柱穴出土土器** (fig.12, 48) 須恵器杯BⅡ蓋(48)がある。端部の突出が小さい。

**SB5109柱穴出土土器** (fig.12, 35) 土師器蓋(35)は中凹みの扁平なつまみがつき、口縁端部は平たく肥厚する。頂部をヘラ磨きするが、内面の暗文は不明。口径23.5cm。飛鳥Ⅴ期。

**SA5165柱穴出土土器** (fig.12, 41・42) 土師器杯AⅣ(41)、杯CⅠ(42)、杯B、鉢、甕などがある。41には内面に一段放射暗文と連弧状暗文があり、奈良時代初頭に位置づけられる。

**中世小溝出土土器** (fig.12, 61~74) 個々の遺構は省略するが、小溝からは土師器小皿、瓦器などが出土し、それらは10世紀前半代に位置づけられる土師器甕(71)を除けば、13世紀中頃、

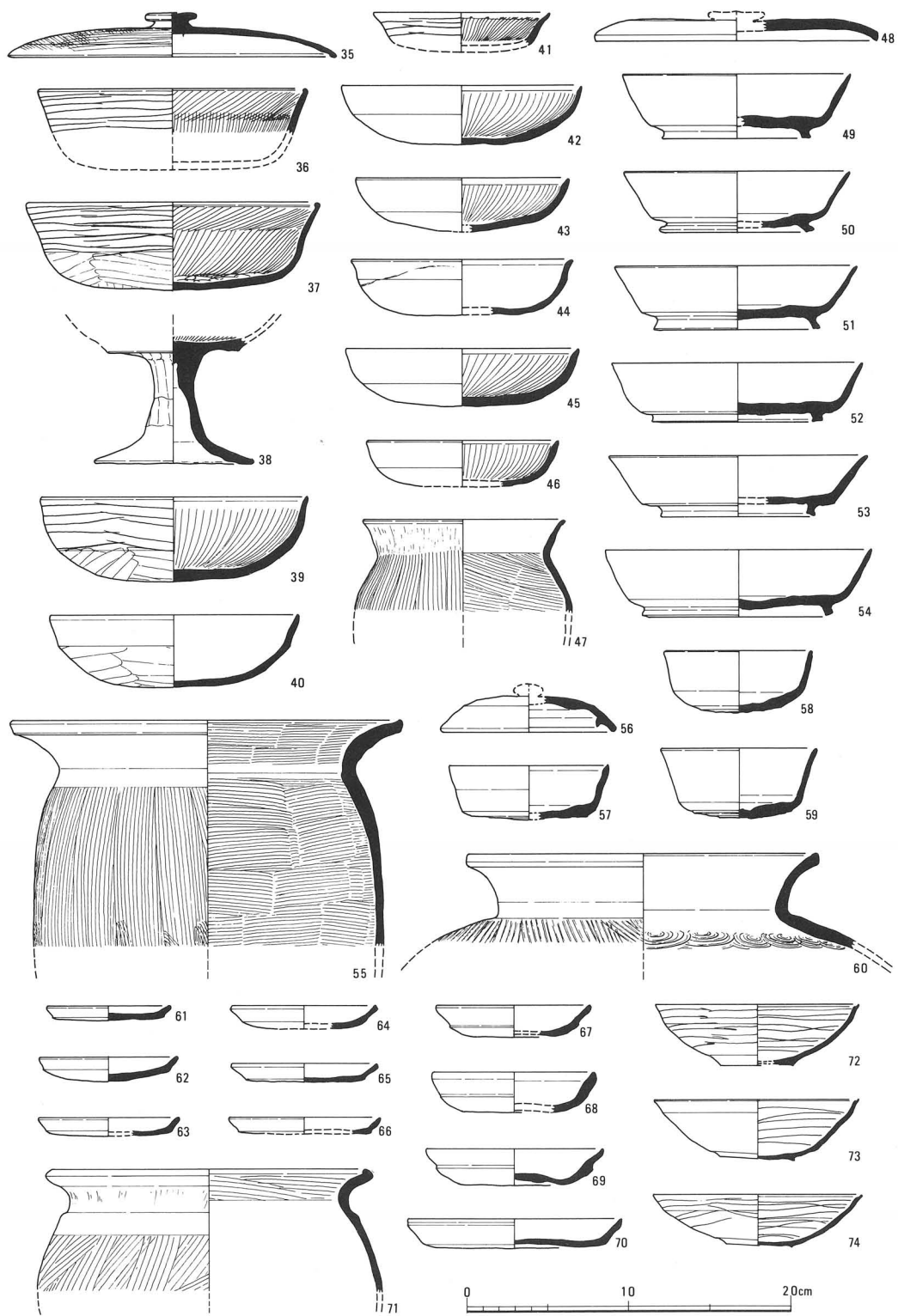


fig.12 出土土器実測図 Ⅲ (溝・井戸・土壇・建物等 1/4)

同後半、同末、14世紀の各時期にわたっている。水田化の時期を10世紀代におくか否かはともかく、13世紀代には、この地域の水田耕作が経常的に行なわれていたことが窺われる。

弥生土壌SK5130出土土器 (fig.13, 1～6) 弥生時代後期の長頸壺6点、広口壺1点、甕3点がある。土壌の中層と上層とから出土したが、土器に層位による差異はない。長頸壺には器高が25cm前後の小型品(1～3)と、34cmを越える大型品(6)がある。小型の長頸壺は頸部径と体部径との比率(頸部径/体部径×100)が62.2～66.7にあり、口縁端部に面を持つもの(2)と丸くおさめるもの(3)とがある。外面調整はハケメのちナデで、ナデを省略するものがある。

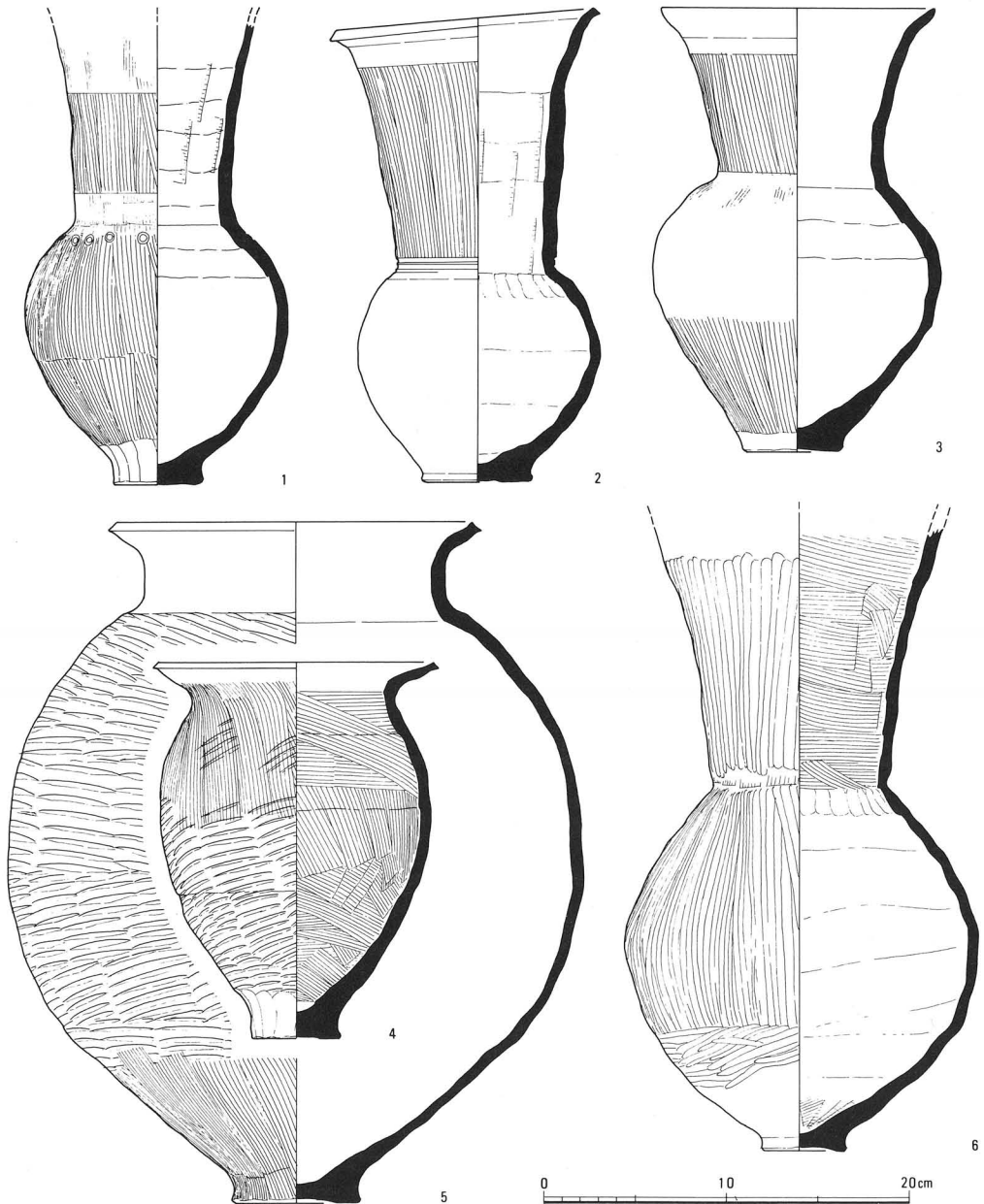


fig.13 出土土器実測図 IV (SK5130 1/4)

内面はナデで、頸部にはハケメのあたりがある。文様は頸部と体部の境に刺突竹管文(1)やヘラ描直線文(2)を1、2周めぐらせる。大型の長頸壺(6)は頸部径と体部径の比率が49.0で、外面はハケメのあとヘラ磨きを施し、内面には頸部にハケメが残る。甕にも器高が20.2cmの小型品(4)と、37.2cmの大型品(5)がある。大型甕の内面は摩滅してハケメがかすかに見えるだけで、外面は叩き目のあと下半にハケメを施す。小型甕(4)も内面はハケメで、外面の上半にハケメがある。これらの土器群は橿原市四分遺跡の溝SD666中層出土土器に最も近く、畿内第V様式の西ノ辻E・D式にほぼ相当し、第V様式前半期に位置づけられる。

**陶硯** (PL. 8, fig.14) 円面硯の脚部片が2点ある。1は大きく外反する脚で、中程にめぐる2条の沈線より上に長方形の透かしを入れる。硯面部の形状不明。脚端径30cmに復元される。灰白色の胎土に灰緑色の自然釉がかかる。SD5111出土。いま一点(PL. 8)は断面長方形の脚端で三角形に削り出した脚がつく。径25.4cm、20脚に復元される。東区の灰褐色土層出土。

**土馬** (PL. 8, fig.14) 頭部から胴部の破片。鞍をつくる以外に表現はない。SD5111出土。

**鞆羽口** SD5110とSD5118とから数点出土した。ともに鉾滓が伴出している。

**形象埴輪** (PL. 8, fig.14) 大刀形の鞘部と把縁の破片。把縁の突起が折損しているが、2条の沈線で鞘口を表す。鞘部の剝離痕跡から武人が佩用していたことがわかる。SD5111出土。

## 2. 屋瓦

軒平瓦1点のほか、丸・平瓦片が約60片ある。SD5110・5111上層および灰褐色土層出土。

軒平瓦は、瓦当右端下半の小片で、内区は偏行唐草文、下外区は線鋸齒文。文様の特徴から、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号では、6641-C型式にあたると思われる。青灰色で砂を多く含む。丸瓦には、凸面ナデ調整のもののほかにハケメ調整のものがある。また、粘土紐成形を確認できる破片があり、胎土・色調から橿原市飛驒町の日高山瓦窯所産と思われる。平瓦には、凸面に縄叩き目の残るものとナデ調整、ハケメ調整のものがある。いずれも藤原宮所用瓦である。

## 3. 銭貨 (PL. 8, fig.15)

**和同開珎銀銭** 調査区北端の東一坊大路西側溝SD5111内の西岸に近い砂層から3枚まとまって出土したが、上下2層に大別される側溝埋土のうちのいずれであるかは限定できなかった。

銀銭は、いずれも鑄上がりがよく、銭文も細く鮮明で、黒灰色を呈する。

外縁の表裏には細かな鑄目がかすかに

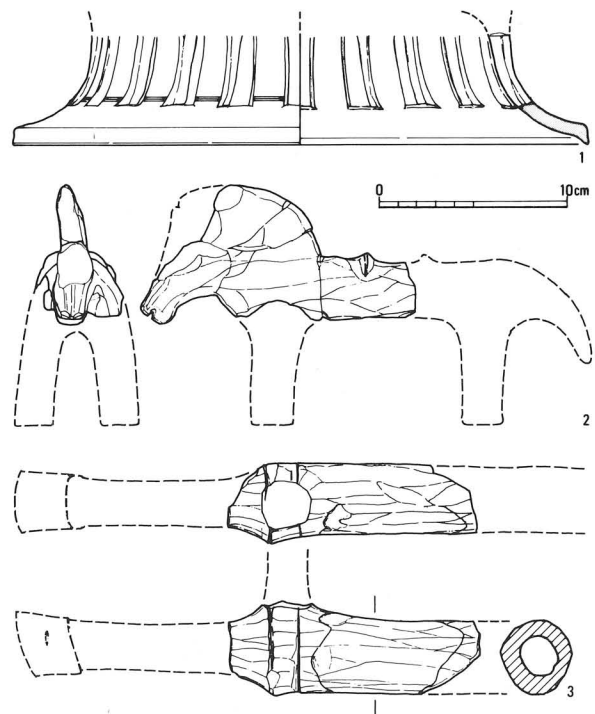


fig.14 出土遺物実測図(陶硯・土馬・埴輪 1/4)

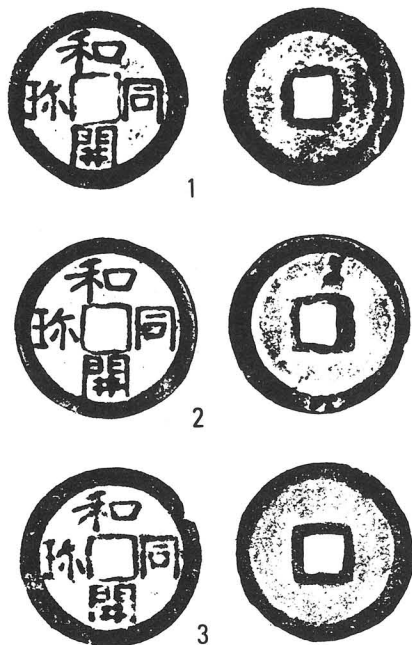


fig.15 和同開珎銀錢拓影(1/1)

見られ、側縁の鑿かけによって生じた「まくれ」がのこるものがある。いずれも外縁の幅が広く方形孔は小振り、字体は「開」を「開」につくり、いわゆる不隸開の「古和同」である。字形はそれぞれわずかに異なっており、裏面に範割れの痕のあるものがある。法量は外縁外径が23.90~24.10mm、外縁の厚さ1.71~1.92mmで、重量は6.374~6.465gである。

和同開珎銀錢の初鑄年については、『続日本紀』の和銅元年(708)5月「始めて銀錢を行なう」の記事にあてられているのが通説である。しかし、この記事には形状や銭文についての記載がなく、また、それ以前の天武12年(684)にも、銀錢の使用に関する詔のあることから、天武朝とする説もあり、さらに、銭文に「開」を「開」につくる「隸開」と「開」につくる「不隸開」とがあって、前者を新しく、後者を古く考える見解などもあり、なお確定的とは言えないのが現状である。

藤原京は持統8年(694)から和銅3年(710)までの都であり、藤原京での和同開珎の出土は初鑄年をめぐる論争に手掛かりを与えるものとして注目される場所である。しかし、今回の出土地である条坊道路側溝は、藤原遷都以前、天武朝にはすでに施工されていたものと考えられており、また、その廃絶は和銅3年の平城遷都以後のことである。したがって、条坊道路の存続期間と初鑄年諸説との関係は甚だ微妙なものであり、そこには様々な可能性が想定される。本例は平城遷都後ほどなく埋められたと推定される条坊側溝からの出土であり、初鑄年に最も近い時期に埋没したことの知れる例として貴重であるが、初鑄年を確定するには至らない。

和同開珎銀錢の出土例は、枚数や出土状況の判然としない2遺跡を除くと、我が国では東は千葉県から西は大阪府までの18遺跡32枚が知られている。その大半は奈良県下出土で、ほかに中国長安興化坊穴蔵の5枚がある。遺跡の性格では、1遺跡で最も多量に出土した小治田安万呂墓例のように火葬墓が多く、他も建物の鎮壇や祭祀の場からの出土であっていずれも埋納された遺物である。今回の銀錢の出土地周辺には、埋納を思わせる形跡はなく、道路側溝への具体的な埋没状況は明らかでないものの、銀錢流通の実態を窺わせる重要な資料といえよう。

番号	外縁外径 G	外縁内径 g	内郭外径 N	内郭内径 n	外縁厚 T	文字面厚 t	重量(g)	備考
1	23.90	18.75	6.53	5.03	1.71	1.14	6.374	裏面外縁にヒビあり
2	24.10	19.56	6.65	5.10	1.92	1.20	6.394	裏文字面に範割れ痕
3	23.94	18.76	6.65	5.40	1.76	1.13	6.465	

tab. 2 和同開珎銀錢法量表(各部の測点は『平城宮発掘調査報告』Ⅵに準拠。単位はmm)